あまくたれよ寿りやらゐたまひ入りくわん
むとはすゝ氏康を何まてみまゐらすれはすのこより
すくこなたにもあらぬ様ま
かゝ候へきとは以ほくするゆへ夢ならぬまきれの心
すらひすれや
其乃後のあさゆうあそひもかよひしもあやまりし乃
と生れ富望来世乃結縁浅からすかりけるなり
天文廿二年三月十四日

九州道乃記　玄旨法印
大かたし天正十五年三月の初博陸殿下九
州大友嶋津なとしての諍論をとゝめて
先にいふか無為成へきとて御進発の事
ありし時一所同云番先条陣乃上数を
乃その道入道せし身なから供奉の事
ありしかはとかくしいなみかたくて陣の末を
はなつまし在国を出て云々あり
四月十九日よ舟路ハ摂津郡まて[illegible]しく女
一日田辺をたち出て文津よりまつ廿二日

松井の城松岳手前くなみて出立座さたるひ
よそひきゝしに雨降ける雨にて終日晴ざりけるに
初めし松井子禅門と云ありて指南し盃をひく
出して對面し其夜は人湖の上にて在宮日
かくろく晴く風を追手にはすると云て出立とて
足白山ちかきをれちく
かすら湊の藤の彩あひかけしもさいなめ磯に翳白山
軍書に欲必則莫合下向軍吉凶とあれと思ひ
にて追手をやうにして湊と云所より辰時に出
り出船し而其日於茶かとは但馬国播磨の

さまひ居く所とい所は舟と海の上にさらく旅客
のと雨さくて而上るに下らりかゝしさこの旦れし
待ちて
立浪の旅の舟は廿里ばかり旅客をくこしそる計りの宮
其日伯耆国と云道堂より舟は浅出して松江
に保の宮手上り見物し待りて後より夜に
出ひを於小にしきの浦と云へる蟹船をとく
出でく
船をするわきは浦の夕波の音ともしやうなる寂なるらん
かやうにはさきひく詠けるにちかきりけると云に

漁人乃いへありてとまりぬ
衾はとまやの乳子のむしろあやまちをうちしきてあかしつ
十七日雨風あらきゆゑにかくより船出せず難儀なるに
あした船人かたらひけるは此比のうらに人も
物もしらずなり船子ども浪のうへをはるかにゆくに
くしやうなる将藥宮のほとりにてやすらひゆくに
とかくして道のほとりに亀のすみかありてとて
山のかたにすすみたづねぬ社あり人の見て
ぞ神と覚えたるに鶏ゆかしく行過て
佐陀の大社なり神のいます処にて

はるかにへたてける小さき橋をわたりて日もたけ
はるかにもとどめかねてふもとにゆく
里のもとめきてまゐりぬ
千早振神乃昔よりかはらぬ地をわたりつる宮のあり
かいまみし繁りを出て秋風とつかれて湖の中に
船ありて平田をさしてゆくに生浦にてはしけ船人の
かよふ浪さへおもしろし
磯枕とふやおもふのうきあたり人のあやしむるにゆきまよふ
やうやうして蕃明の岸わたりきつきたる森
ここにおとりして木社あるへし見

然く出て翁ありけり當社の神官千家北島
両家とも國造と申しいひけるは古くより見えたり
て其後權威富貴にして権勢もつて次第にありたる
頃當主ひとくやすく居るところに各別の諸家
といふ者出来りて對面しける古歟今
人ありけりとおもふく同居して一番にて
為とふしあまり行てとと每に備へしるあり
出雲國造より和まつさたゝに青楷かし丈よく
送てしれ宮る様に笛敷の役若衆一ところみあ
数丈まて乱舞まてその思ひ行けぬるもあまた

其九日朝よりの雅ありけりつるの能も取ま
さるにいうた祝舞にの近日と立まゑよりとあへ
くるとおりぬしくて
其の秋の初くよあいたその事とかくありしやまいうる 読
遠手盡盛鳥到出雲國初有二十一字録とありき
ちやりく宮代のそ誠にうちまろうりとま
ちことを以て心をつくしけふにもいはく複冊に千
敷方へはらりしを送りて出雲司ま近いへ一方へ至
いることあるしれゆひけりに儀を持て同千代
書て為りもう文當社宗教より發句を乞

なまめき

卯乃花や神のいさめもゆるすらむ

〻やう小さき宮のけはひ手向くさかりいく今物がたり

白川小瀬より連歌ありて昔もかくは百

韻興行ありしとぞ船小舟にて進待く發

句承なかりしいふかひなき事なりかくて浪より

こえくむせしいとゞ雨のふりてひまなきほどなる

くゆるも道の句種は人の心に成べきものをとて思

ひくらべぬはむかしを思へばかなしき波の音のあはれ

秋のよの夜すがらの物語やうし秋のよと

廿九日石見の太りとも云所より海をみつゝ明ぼのに

出仁間といふ浦まで行侍る道の程いとゞおもしろく

古へ右手の方はたゞ白波の高き磯山のつゞき

かはくちなどあるあたりは人家つゞきけりとぞ

出ぬれば風情をもよほし侍る石見の浦の波の音絶ず

そゞろに感涙に銀山へこえてみるにやまの梅さと

云城主和乃とゝ少とゞまらせ侍る

城の名をきゝつゝ猶なきなからもやまは　宗祇

金とやまぶき薫る夏花の庭ありて楓若

よろしく

湯山寺乃中に文とやまのかへて
温泉は津まうぬ出て寶蔵院にやとりぬ主殿り
先達連歌の一座あるへき由所望して支度もかくこれ
百韻成つる様得書ぬ
浦のに藤まさくしめ出けり終日ゆかる
六日おほぬとおらい路よりそめも一ならむ浦路を越きよ
しめく發句有ける中にも書筆に
うき草の縁よりこそ世りやめめ
七日濱田をとかく行に高角といふ所なるこそ
あまたり見んや書みめる人ぬたへ人丸の松の木写

ちよふる世の月をこそおもへぬれと人丸の縁を
しのびおりいひ出て
うた言の葉を世にへぬ迄とくちもせぬ名のみのたへる雲の
とかくして出つゝまいるこの紙の上書をとゝめてよ
さて行に鴻と云所にて雅を世の常
常なる事は我思ひおこめ
皆人乃命かならす世の花も世ハ浦に渡れよ
相見しは濁小畑と云湊に唐船乃着て有しを
と船人のうちよりかゝりは世ハさらハ見物をもしとて
まことは成るも心ありし

我とても浦つたひして漕出ぬる舟のゆくへしらぬ湊よ
あこかれて波のまくらきこえぬ行て
小倉といふ所に着て人や行て夜更て河舟たてゝおこし泊
十日瀬戸崎といふ所にて出船せしに風あらく高
き波ともに船をもうちかへるほとなり白臭した
ゆかりなき急ひにたゝならす多くありしを見えし人
舟ともに漕出たりしに漕の人も恐れさはきしかと立て
山の峯に舟のへなとる古町といふ所に着て寺に上
こゝも千里とも行にこゝろすみて覚えしにかりし
こゝの庭よりまかせて海けりよかれはの跡

いたくふりて草木とも吹しほりつゝ人名
栖とゝめぬは雲の海の上遥なるやうなり何人か
家たちさきの志ら孫ともも先へ出てこゝの母も波の流
みなおかしき人も命ひとつにと思ひあらまし
らしても君よりも孫の乃おさけもかゝり船路
もやなりぬ風なきに波の音高し かくさき
わひしく見えしは船路さへに恐りもあすしみを
船人かなしみて今はさらに雲風波まに漕
出さんとしいふ合の高きれとも出して寺
せとにて大寧寺大内義隆のさはく

ちまたに有と申し程に立寄て一見して其後
より源氏の大将にて同じく妙某と申すと也
也ける事を聞き信補乃和尚出来て後生を頼ける
乃物語ありしとぞ是にてつたへ云あしたに当ても有
ことなり
かくて此所を過てたにのゝ上にも清き山あまた有て此
心念無形通貫十方といへる事も有りて又も思ひ知り
是見ることのつくや
豊浦宮は則ち面影のごとく
名を残せし池乃名も有り此よりこゝに是も前の浦の様

たるひと云在所ありしに一夜ひとひ侍りけるとく
うつし此處より小あめ降りしくやみしとおもはぬ
小磯のほとりを過て此たよりといふ浦を侍りて
入てあるは阿弥陀乃まへに札を立たるを見て人の
関乃渡りを過て阿弥陀寺と申寺に侍りに
ちらしける事に此人の内裏と申て侍るなる
侍り案内して安徳天皇御影并平家一門
乃像ども見侍るに古今の短冊などみ
ちらし手向ける人の手ともありし哀に
なれば筆を染てぬさとも波のなごり

豊前国門司乃関あるく

古ハむかし清盛乃人一所に籠城をかまへけん其跡あり
兵粮船なと渡りつゝひしと物を成して名ある所乃浜
此国ハ九州の内也
昔ハ小倉ハしらすと渡る者ありけるにて渡りしくらの浜
岩尾の柳浦乃名生と云所有野と云里なりしか
豊国の山くらき遠き小ケ嶋の経
同月廿二日赤間関を出て船中にてなかめやる
小や波風乃あらきに数万小倉まて漕出て渡る
戴浅ことをかくあらそひして飛別第一なり

為行まて船人の事を語る也ここに都と申す
滝を見て帰る者も有るなしとて見て漕り行者を成
く見松して今日に着たるは某日和のよろしきことなれば
龍なとの身をかれて見れとかゝるを勅撰名所には
金と云字の書たる所に見えてけるを瀧ありとぞ
王海ことなく我々も此うちに語り合渡りて
万葉に家をわすれ遊渡る人非にはあらじ
清くうみなとも思ひハ云ぬ
蓋渡る浜の浦乃時を待て漕出て遠く思ふ

呆屋りし出ぬるを遊ぶさ行打つゝ小夕繪あり
くみなとてやうく志賀の濱より若て金剛山の
文殊院坊より盛上り海の南社大明神乃御末
年と號せる事よ春日鹿嶋當社やうに旧ち
比乃神なりし旧縁乃縁起あらはさる出して〈本ニカナ山ハ哥ニ二入至〉
みなもとく次に波あつさ坂下の壺乃らる
東く島よりつくるとのみ中乃こせる社前
御前のよし社僧乃さてん德乃事文番推の
神職みなし山をはそ那とて一句のは事をはせ年ゝ
よそに見ゆ見得りけるに砂乃あとさこ盤をも

海乃中道とは此濱をいふさき修されたる舟へよく
かうさ雨まて十町あまりともと十四五町けるあ
もえと見る事より文殊いとく出ぬとは
橋立乃事などはる縁そさ當社云
安曇磯良丸とふる神功皇后異國退治の時
龍宮より於兵船乃楫をとして海上の志ろ
へもし神なり志てもくう（らくい）絵なの跡く
みえ山乃てやかふ志賀乃明神の東なる浦なる道ハ
名所也龍の宮のまえ波成けるかうなる中乃
此雨首成りさて奉納しよる大文日朗あるさ此種よ

若崎よりやゝとほく見ゆるは当宗となくつゝきハ八幡宮
て水面をむかひて立る戒定恵乃三学の若
代まうし宮司まゐり年よろ所よ吉うしれ松もちあ
古木に雲をかゝりて
すゑのこし世と見えと流れ稲崎乃香取の武蔵の志らし絶
日たくく待けまち指多う見んやりまつの里きるうり
家を袖乃湊と里人のとよしへ家せはゝ
いさ雅はそのぬの比安藤家神乃湊の浪のまくらま
日暮暮ぬれは船をて朝め見ひらきらかは紐の湊を
廿六日宰府に天神乃住のひし所と仰乃まく

見猶乃こゝめ隔るもよき所故宮ある所七ところとかや
り英上してうちかゝりなかめ来世後あり旧跡乃
まこと檜松乃みとりくさ〳〵ことをきかたるこそいと深くの小
雨らにのこる宮へと行は吉山よりとなく苔むす方
七八町とかやうちもまちまことみえて観音寺あり
寛にに西都とも云塔をも跡なり安楽寺名古木
あるへ焼くさきうけるあり所まえ乃生出る末代
見え多り
萬代をとりてひて飛梅のこふさへいゆ所乃と来住ん
文なる深川を里人にきゝて見たる所ゝなり

思ひしみてかへる見たる小河のわたりにしつみはてぬる世なれは
うちわたりゆく
身の波はむかしにかはる世深川やわかれぬる思ふとも
思ひ川をよみて
菅谷といふ所にてやすらふ処にて思ひ川
おなしこころにおくれ論しける折ふしのけしきの
関の名をきくてそれかれ故の陣跡なる
ことせしめ入るまく事有けり浅つくりしてこと
合のしせてやすらふ源家の武将等やゆかりの
此所に家を山を開きて葉内某はなれ侍

小の浦といふ所にて右は岩つつしむ山をちかく見てゆくに
昔は富士山変重なることく山伏の住みかにありけり
見けるほとに此あたりへ来て比にかは高橋といふ者城郭
をかまへて有りけるか其後清浄光寺のあたり
にありける岩屋にて城せしめ落されけりける
此所に伏見の住侍と号せし小太田雨の名残を
うつし見けれは
立つつく雲の浮き見ゆる如くにて小さき山のな
可也山をとて
戯に行やの山人来入るて秋とや霜ふかき庵

姪濱ハ古人の歌よまれし所にて見物して貝利して絡てと
見絡侍て八幡宮に成へきことにて文ありけれは見
まかに
旦はかりの所ちかきをやせらる時分こそなしとめ姪濱へ
廿八日姪濱にゐてたち侍る生松原見まほ
敷りて
其しき風にまかせぬれはかやし今くかりそきし
姪濱にて人々発句執筆せられ侍る所
懐帋をとみて奥書を望せしに
見えぬ文ありてれ末の行の前に絶えく

六月二日姪濱興徳寺住持母峯和尚携和漢
興行ありしに人々さそはれて発句を望まれける儀にかなはねはよく
御成乃御供にまかりけれはかくは侍るとて
其発句をかきてつかはしける入韻を望せしによ
風のまに葛の葉まけのこゝろそされ
社　同　六月　梅
同八日利休居士へ宗白敬濱酒ありける志ありし
此箱濱ありまて後一折と催されて発句つかうり
まつる地そこなりし所でハ筥崎八幡乃社の
昔代ハよそありつきしも些所への

雲まよりさえし夜のよはの月
かたゆくも晴れし雲は西も遠く
箱崎の八幡より関白殿御参ありし時にすゝめて
名あるものゝ中に松よせて統(?)流
のこる松を名によせて侍らせけるとなり
松　日吉　新大納言
先にさし出て松を世の若緑さかえむ君の代の友
関白殿箱崎の松原にすゝみて何かさしよりて
各匠具せさせ給ひて海路具の事ありし松に
しるしまいり帰とも見へて出羽荘ありしに
立出る袖の湊の夕すゝみしてしく猶袖浦を

箱崎のさかへの御使せさせたまふ折りに松原にて居給ふとて
人々引つれまかりける庵をたつねしに連ゝ
青葉にも雨のはれ行風の浪ましかれぬ夏の夜の空
六月十日筥崎に参りて小松香椎の浦見ありけるに
かれやこの塩干に見えし香椎の浦の波の花さく
名高き松は流てまつらひてみる松へ出て
千代の行濱よりはかくもして
いにしへの松の名残とや濱の名
對馬守宗義よりの歌一首をそへて
參向の時ありしをはや出船のよし彼の人に

光庭小池ふかく屋さしけるに
昔偲乃道さかり(?)侍るに代は遥(?)かへ(?)るへしこの道(?)の為

卒因和歌韻

始識逢君情所鍾　向来相約對間窓

帝都門外莫言遠　千里同風一樹松

君か代乃(?)川に(?)流(?)れ(?)も(?)絶(?)し(?)さ(?)かえ(?)ゆ(?)く(?)乃雨

発句

こ(?)ゝろ(?)まゝに(?)すゝ(?)しく(?)秋(?)や(?)雲(?)乃(?)峯(?)

六月廿五日一折法楽(?)すへしとて(?)濱(?)白(?)大坂(?)にて(?)

なきり(?)

浪乃音(?)も(?)松(?)の(?)嵐(?)も(?)ち(?)かく(?)し(?)西(?)行(?)法(?)

何(?)事(?)さ(?)はるか(?)にて(?)世(?)

とも(?)すゝ(?)しく(?)

秋(?)立(?)や(?)

女(?)七(?)夕(?)関(?)白(?)発(?)花(?)瓶(?)

発句

五下一

七月四日寅白髪といふ所の浦より淸海陣なるを船
ゆく案内をしりたるなどと申し船よりあ
南の海をさしてゆくに見えて上らぬ夜を定めて侍る耳
秋の七日にはあらくなりぬ船なる七六日よく
逗留し侍りて七日の泊に寝覚侍りけるに
何とよふく風やと浦の波にまかりぬ
六日のあしたまだきに船出したるさまに風なき八月周防に
ゐる岬の手を見るに生ひ茂るの若をおしふるまえ此
ころ船子に云出所よりくりて七日の山口りし
たりぬ今宵は七夕のあふよなりと思ひおもく

暁には此寝覚に
七夕の別れの袖をうちかへしさのごと姫に比
いひ所に高社見くめぐりて国中にみちて林まく立ち
海なる舟をさしくて西に本国寺位招一會景
を拝しとさまさに見えてもかれ侍ゑはとりる
なく又日は逗留して九日に
ゆふ日月の山里一しまに船木の本に出の南
十日山口の浦にて息射天神へ参て浦りむの浦
ちかくて田尻みまこゑ船のまかりなんと侍て屋形に
居て浦に當社乃供僧楽坊茂の所にかたて

一面ありとも見えぬ程にとく其所に入りて人あまた
のみなとより道祈りて夜半ばかりに百韻はじまりし
けるが其よ此船にて夜の間に浪をあり又行侍る
御ちかひしかともまた浦浜より一ツ浦の船
あしたは上関にして風のまゝに出船
田島といふ湊より海の面はるかなる所に網の
あまたありけるにてあまたを
上の関といふ所にあまたなりて船より津の浦にいたりて
十一日暁田島を出て出船して上関といふ所に
船はいそぎけれは明ぬる程に陸地の浦に入て侍り

子の船出とものかし折ふし岩国山さしてこゆるや
宮島へ
折ふしいくつしまにて舞楽ありと見えて岩かど山も波にしつ
見てより是厳島につく社壇と見えて
鳥居は海の面二町ばかりにさし出て
立て此宮の廻廊も柱さへみな潮に浮かりてみゆ
船よりみえて
夫此島の社は岩根の岸まぢかく波の上にたてたる所
比類なく当社宮司桐島左京亮とかやいふもの
しきりにまうけて月に成りはてぬ文字

浦くに経て堀丁塩満寺なる所にて暮て汀二
三町ばかりも坂道にあらぬ河しわたる
大海乃泉にまさしき宗祇覚作なり程なき弍丈大
聖徳良致台所ならべく十二日一会あり歯
社よ名ある池とふ所に連に
秋うつり月やこのみ乃いけの水
十四日ゆふ棚守連歌興行ありて人々まうけし連
ともなふ夜川の月よあくる程りつきさせ給ふに
やさしく辞退申侍りつつ藪句
ありし哉と和泉守の心にまかせ申ける子の

鳴尾れて
秋やまづ山しげやかくさき波
うたてうにはつくらし我まさらば暁まあるし
を越えよしの月まで浦野ら高さ着りし無
て盃つくさ禄くる忽ち浦二所出座ある所
乱舞ありて根拵ばせ出して舞ひ給ふなると座を見
き所なる真坊と云ける大なる此玉祭の向
など物まへとまさけるまた附当の二丁はじ云ふ
けるかと長は此いつもやうにまうし結ぬれ
しき事なりと云一首ばかりにて何しくさ

志かれともやうの執心またまつる程の名も侍らす
十五日宮嶋神前にて延年といふ事ありとそ人々
見物して夜まつりに船とも引つらねてもなしと
まうて侍るへきよし侍りしか備後の海の儀にて府中に
御参ありし也十日にかさより侍り行
田清水のうちをも見わたし宮をも見物して
よしあるさまの見ところ侍れと草かともかくも深き
といふなふみよう波の立つるに昔にまかせて舟を
多くあるの月やさしもまかせぬ
まかせちる秋も今は名もしらて行小舟のたよりに

備中国にあるといふ吉備の中山にてとさゆきしと
なかつさのうらなと申とこそ
照やありとほく海も高山なとなるいとうる
九日備前の国うちといふ所に立よりて清
なかれ宇治の里の所々けしきもやうてある人
きよしとて見えけるにこそ枕の月をかたりて
陰うき旅ねすれは
和歌の浦に月もともにのとかなる
まくらに月まかせてもけふのさかしく
以上

秋なる月にも勝りてめでたさ無類なる眺めのさま
風ありて波荒くなりてかの所にとどまる人々も
まさに泊り給ひし侍り
又波の上をなだらかに漕ぎて此月もこゝにて出づ
やらくの峯こ波高くて船を出して播磨の室まで漕ぎ
漕ぐも小波浅我にやくしと云ふ泊にありて
今宵あはぢの嶋の見えわたりて
須磨の浦近くして明石の浦も見えて泊に入り
廿日の早朝に出でて家嶋をさして漕ぐ
とかや

廿一日暮船より出て漕ぎ出し給ふ人々漕ぎ出でて
ひめぢと云城ありと遥かに見えてあまた行きてまた
川より紀見えわたり海の面はるばると浅く船人あり
高砂の浦は水上に大きなる備前の児島のやうなるなど云
名も高き事も両方の浦川渦に流るゝ
来やうに浦々の船の数も見えたりと見渡して
高砂の浦より船を出して吉備の中山にも近く
音に聞く尾上の松をも見て
是こそ松帆の浦とて
我身

にけるあさかすくとおもへら浦にむかはく
行船のさしを兼来りしか片帆に成てしはらく
さそまつかへ浦に入く大なる也て船よせしせてみるか
小浦して此月浦ありけるは人くえ悪しに漕き
あらはたた黄な湖の秀嶋て浦かまにもしたる月の兼
又浦の東と山に峰をえてふしの上まりつて志
海辺にはせちて
伊くさとと波ちて海たにもしみるとしや鐡の尤日暮るにふ
浪戸の湊まて
すあゆちら里代かしろの山茶や雨まのかくや煙を戴てむ

書ならかなと波のあらくなすらかにかくれ此所なりは浦
めく寺吉田の森に成船のわたるとしくて
おもくあらの夕波あらく成は宇さまて磨の杜乃林に
去四月廿日後を出船して九州をへ海陣乃と知て
南の海をまはりて七月も二日とかへり雅浦に
来ぬ思ひ居越ハ絶りかさし日のなも名をもとめ
あかきをと此くの来りし浦てしかくるさて
なかめし所の浦まて来すら一覧あり留宿もよりありかつ

九州のみちの記　豊臣勝俊朝臣

大相國より給はりしむね事をうけ給はりて年と
あ天正のすゑつかた筑紫へ御出立の由にて
よし事にて海道にあつまれと日乃本の兵船を
催しも侍奉すへきよしかくてむ月の中九日に
り京をおもひ立出年としを経つる宿を
まて人のもとよりむかふ調しられぬ旅ゆくとて手
此二首をとなみくはへらせたりけるか
玉津の花の山をたかうかへるみかくらふことなむしとも思
あさましハぬれ衣をもとにありそめて